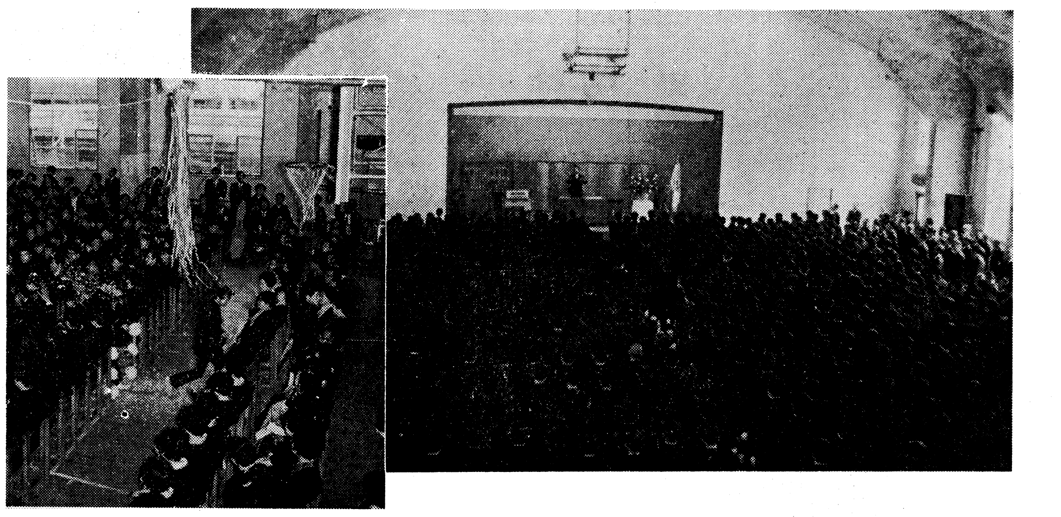
向陽新聞
高知市塩屋崎町1の2
土佐中・高校新聞部
編集人　宮川隆彦
発行人　藤戸啓朗
印刷　高知印刷

向陽新聞
創刊二十年迎える

向陽新聞は、今回で通算八十号創刊後二十年を迎えた。創刊は昭和二十四年三月十一日である。



勇躍、新しい生活へ
高校卒業式厳粛に行われる

暖かい早春の一日、二月十五日本校講堂において、第四十四回卒業式が行なわれた。卒業生二百八十七名のうち就職希望者二名を除いてあとは全員大学進学。

開会の辞で幕があくと、あの卒業式独特のムードの中に、何かしら張りつめた空気が漂ったように思われた。そしてすぐに卒業証書の授与。証書を読みあげる校長先生の声もこの日はまた一段と厳粛に響いてくる。父兄席のお母さん方も感無量といった感じ。証書授与の後は、白川均君が、全国中高等学校連合会より表彰を受けた。

続いて校長先生の挨拶―いつかこの社会に繁栄の反動が訪れたとき、その大事なときに本当に役に立つ人間は試練に打ち勝ってきた人間である。大学といっても今までの様に平穏では決してない。厳しいものが待っていると思うが、これを人間試練の機会とみて、自己を確立してこれに対処していって欲しい。そして本校創立の動機でもあるところの、自分の能力を世のため人のためにつくす人間になってほしい―。

ひき続き来賓の祝辞。高知県代表、久保高知大学学長、大西振興会々長、米沢同窓会々長と続いて祝辞が述べられた。

そして、在校生代表の尾崎承一君より送辞が贈られた。それに応えて、卒業生代表の加賀野井秀一君が「私達はこれから若さの特権を生かして、それぞれの生きがいをつくり出してゆきます。そして常に自分と社会を弾劾しながら自分達の生活をつくり出してゆきます。……私達は在校生の皆さんに何もしてやれなかった。しかし皆さんには、私達が乗り越え得なかった壁より一歩あゆみを進めることができると信じています。……いま、環境や時代や、人間であることの困難にたち向かって新しい生活へ勇敢に進み出してゆこうとしている二百八十七名がいたことを覚えておいて下さい」と答辞を述べた。

蛍の光が静かにそして力強く流れ式は最高潮。その後記念品贈呈、父兄代表謝辞、校歌と続き、いよいよ退場。今年はくす玉も登場して、ブラスバンドの曲にのって拍手と紙ふぶきの祝福の中を、二百八十七名の卒業生は元気に巣立っていった。

卒業式に新しい動き
送辞小委設置案　委員会では否決さる
生徒はつんぼさじき

卒業式の送辞について昨年末から例年とはちょっと変わった動きがあった。

十二月四日、〝送辞小委員会〟設置案が高校生徒委員会に執行部から提出された。同日、賛否とも十六票で、議長職権によって可決されたが、一月十四日、職員会より差し戻しを受け、一月十六日の委員会では、前回の議決がくつ返され最終的に否決された。

執行部案は「送辞は在校生全員を代表するものだから、もっと皆の意見を入れたい」との主旨だった。小委員会は、顧問の先生一・二名と数名の生徒からなり、文の内容はアンケートをとり、幾度か改正案を掲示しながら作成するというもの。読み手も小委員会で選ぶことになっていた。

職員会では「最大公約数的意見で作成すると、送辞そのものの個性がなくなる。主旨には賛成だが具体的方法について考え直しては」との理由で、三十一対九で委員会に差し戻しとなったもの。

委員会の再審議の場では〝個性〟ということに焦点がしぼられたが、結局「送辞に個性を出すことと、皆の意見を出すことは両立できない」ということで、五対十九で否決された。

送辞小委員会の設置が提案されたのは、本校では開校以来初めてのことで、大いに注目するに値するものだったといえよう。

ところで、十二月四日と一月六日の委員会では、意見の交換は全くといっていいほどなかった。おまけに、ほとんどの生徒委員はその伝達者としての役割りを全然果たしていなかったようで、一般生徒はそのような提案が委員会でなされていたことすら知らされていず、完全につんぼさじきに置かれた状態だった。このためこの成り行きにあと味の悪さを残している。

以前、京都、大阪などで送、答辞をめぐる問題が起こったこともあるが、一部の先輩の間では「卒業生を在校生全員で送ってあげようという精神は歓迎だ」との賛同の声も聞かれている。

このことについては、今後いろいろと意見を交わす必要があろう。

≪一月十六日議事録抜粋≫

委員　土佐高生の個性を個人の個性よりも出したいから原案の方がいいんじゃないか。

特活　アンケートをとって最大公約数的な意見で作成すると、ひとりで作ったよりも個性がなくなる

委員　先生方の中で、みんなの意見を反映させる主旨には賛成だが個人の個性が失なわれるので反対というのは矛盾しているのではないか。

執行部　小委員会で挿入してほしい事柄を読み手に伝え、文は自身で作成してもらうという修正案を提出します。

委員　個性を出すことと、みんなの意見を出すことは両立できない今、修正案を出したところで中途半端になってくる。

採決　〝例年通り〟が十九対五で可決。

テニス・コートに仮校舎
生徒増加に備え

高校編入生の受け入れによってここ三年間に増加することになる生徒一八〇人を収容するための仮校舎が、今度、テニス・コートに建てられることになった。工事は春休み中に行なわれるということである。

この仮校舎は、プレハブの平屋建てで、三教室を容し、便所や下足入れも備え付けられるというが、建て坪や内部の間取りなどは明らかでない。

建築にあたっては、テニス・コートに面している中二、中三教室への日照が妨げられないように、との配慮もなされ、ずっと東の吹奏楽部の部室に寄せて建てられるという。

なお、仮校舎にどの学年・クラスが入ることになるかは不明である。

ところで、テニス・コートへの仮校舎建築、及び生徒数増員については増員分の生徒の自転車置場をどうするか、など切実な問題が未解決のまま残されているのをはじめ、増員後の教育問題など、種々の問題が伴うことになる。このため生徒はじめ先輩諸氏の間でも土佐校の将来を心配する声が高まっている。

≪二面に関連記事≫

主張
自己を見つめよう
ティーチング・マシンからの脱出

向陽新聞も本号をもって八十号となることができた。今までの記事を拾い読みしてみると、必ずH・R、生徒自治の内どちらかが問題記事として提起されている事に気がつく。どこの学校でも問題になる生徒自治、我諸先輩も例にもれずこの問題には頭をいためたらしい。「いずこも同じ秋の夕暮」である。

我々は、小学校・中学校・高校と必然的のように感じながらも無意識のうちに卒業・入学を繰返してきた。しかし、はたして我々の進んできた、そして今ある学校というものには、どれだけの意味が含まれているのだろうか。小・中学校を義務教育として強いられてきた我々。その長い年月から生まれ出た高校進学の夢。だが個人の意志はどうあれ、とにかく高校へ行かねばならなくなった世の中。そういった世に疑問を感じ反抗する少数の勇者のあまりにもの無力さ。そして、その努力さえも忘れさられた現在、学校は一つの教育機関としてではなくて一つの固定した画一的人間をつくるマシンと化している。だが、我々は、そのマシンからつくり出される商品であってはならない。生命を持った自分の意志を持った生物でなくてはならないのだ。そして、そうなるためには、ただ学校の学問だけでなくいろんな本を読むのも良いし、友人と一夜を明かして語らうのも良いだろう。だが、我々にとって一番身近で利用しやすいものはこの土佐校である。

ある教育研修生がこう言った。「人間的に成長しているとは決して言う事のできない人間(教師)が自ら(生徒)を一人前に教育しようとする。ちょっと考えるとこれ程矛盾したことはない」

現在の教育制度の欠陥を見事に指摘した言葉である。我々の今までの成長はすべてと言って良い程、学校教育によりいろいろな教師と接してきた。その中で単なる「ティーチング・マシン」としての機能しか持たない教師、あるいは、あらゆる相談にのってくれる教師に接してきたはずの我々は一応の人生観は持ったはずである。ところが、ともすると我々には自己というものを見失ない、他の意志によって動くという傾向が現われる。いちずにこれを学校の教育体制のせいにするわけではないが、大きな要因のあることは否定することはできないだろう。我々は、何も矛盾を感じる事まで学校の言うなりについてゆく必要はないのである。

だが、ただもう一つ気をつけなければならない事があるのを忘れてはいけない。たとえ我々が商品になるのをまぬがれたとしても、ともすると、その人間はセツナ的になってしまう。

目測をあやまらず確実にあくまでも自分の意志で進んで行くのである。友人の長所、先生の知識そしてあらゆる人間を知り、自己の人生観を組みたてるのである。その上で、学校の自治に興味がわかないのなら結構、だが、その前にその考えが学校からの圧迫によって形成されたものか否かは知らなければならない。

今、我々のしなくてはいけない事は、まず自己を見るということなのではないだろうか。

学校は我々に、自我というものを与える場なのである。授業(学問)も、生徒自治も、そして友人との交際もすべてはこれに帰着するのではないだろうか。

ひとこと
大学の乱世

○…「若者たちが激しい暴力で否定しようとする問題の多くが真に問題であるという事実は否めない。極端かつ不合理な、特定の権威主義に対する学生たちの弾がいが非合法であるとは考えられない」……。このショッキングな発言は、実はキリスト教の権威ローマ法王パウロ6世のもの。日本ばかりでなく世界的にスチューデントパワーが猛威をふるっている現在、賛否は別としてこの意見は注目に価しよう。

○…ここで日本国内の大学をみてみると、まさに〝戦国時代〟の様相をしめしている。紛争中の大学は東大・京大にはじまって地方の無名大学にいたるまでその数しれず。ヘルメット、ゲバ棒に身をかためた学生があばれまわっている。彼らの目ざすものは「大学に残っている古い封建的な制度をなくすこと」、また「マスプロ教育をなくすこと」「大学の管理運営に学生が参加すること」などである。一部の学生は、そのためには暴力を用いてもやむをえないと考えそのことにあまり罪悪感はもっていないようだ。

○…このような学生の暴力に対して社会の評価はきびしい。「暴力学生は学外へ追放せよ」「学生の本分は勉強であって、ゲバ棒をふりまわすなんてとんでもない」「かれらの気持ちはよくわかるが、暴力でうったえるのはよくない」

と、いうような意見がもっとも多くみうけられるものであるがどれも皆一様に学生の暴力を否定している。たしかに、これらの意見はたいへんもっともであって、否定することはできない。しかし、大学紛争の問題点を学生の暴力闘争だけにしぼってしまっていいのだろうか。暴力をふるう事がいけない事であるというのは小学生でも知っている事で、まさか大学生がわからぬはずはあるまい。それなら彼らを暴力を使うまでに至らしめたものは何か。人間性までも変えてしまう特別な原因が何かあるのではないだろうか。

○…実社会や大学にはいろんな矛盾が渦をまいている。教育の面だけでも、大学の教育のマスプロ化、教官の無気力、幼稚園からはじまって小中学校、高校へと続く受験準備の教育など。これらの事が学生になんらかの悪影響を与え、その結果として暴力闘争としてあらわれたのであったら、暴力学生だけを責めることができようか。暴力は単に〝あらわれたもの〟にすぎないのであって、本質はそのうしろにかくれているのではないのだろうか。

○…現在の大学は社会に対する危険信号ではないか、という説がある。つまり、政治・文化・教育のあらゆる分野での問題が大学に集まっていて、それぞれの分野での行き詰りの前兆ではないかというものだ。とるにたらない説かもしれないが、案外ピントははずれていないかもしれぬ。もしそうなら、信号ばかりに気をとられていると、とんだ事故もおこりかねない。

○…将来、大学へ進学するであろう我々土佐校生は、現在の荒廃した大学を見て、何を考え、そしていかに行動すべきなのだろうか。(K・F)

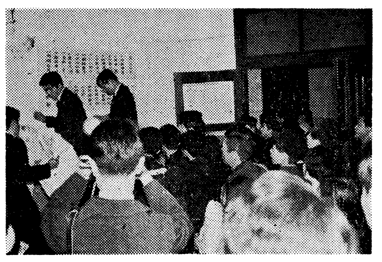
暖冬で穏やかな試験
高校入試行なわれる
中三も同じ問題で〝受験〟

去る二月十八、十九両日にわたって高校入学試験及び中二・中三編入試験が行なわれた。

今回は本校中三生も編入生と同じ日程で同じ試験を受けた。この試験は土佐中生と編入生との学力対比の資料にされるが、これによって高校進学が左右されることはないとのこと。

今年は例のない暖冬とあって、受験生から、雪の吹き込む中で受験した昨年の編入生のような不満の声もなく、穏やかな試験日となった。一方、体育館では例年のように付添の父兄が落ち着かない様子で、はり出された問題に目をやっていた。

受験生に土佐校の印象を聞いてみると、「親しめそうな生徒が多い」という声が多かった。また、「先生の年齢差が非常に大きい、特に高齢の先生が多い」と指摘する声も聞かれた。これに比べて、「校舎が古い」という声はあったが、試験中は好天に恵まれただけに、「照明が悪い」とか「寒い」とかいう声はほとんど聞かれなかった。

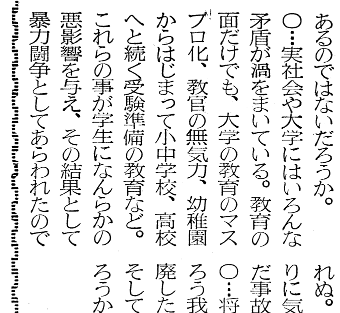

発表風景

一方、本校中三に、今度の試験に対する意見を聞いてみると、「土佐中生はだらけている。ひきしめるためにも今後も試験は続けるべきだ」「ああいう試験はやってもひきしめにはならないから不要だ」「土佐中を選んだのは高校入試の無いのがある程度魅力だったからなのに」と賛否両論。高校進学の際土佐中生を落とすことについては「せっかく得た友人を失うのは辛い」と、落第制反対の声も聞かれるが、「高校で編入生に押されてついていけないくらいなら」「生活の乱れきっている人がいるから」など賛成の声がやや優勢を占めているようだ。

また、中二はまだ一年あるせいか、あまり関心を寄せてはいないようだ。「試験もやるならやれ、落第もさせるならさせろ、仕方がないさ」という声も聞かれる。

今後もこのような試験を続けていくかどうかについては学校もはっきりした方針をうち出していない。

自転車置場また乱雑に
風紀小委(中学)も徹底せず



しばらく前から自転車置場の整頓がやかましく言われているが、最近またもとのような乱れが目立ってきた。

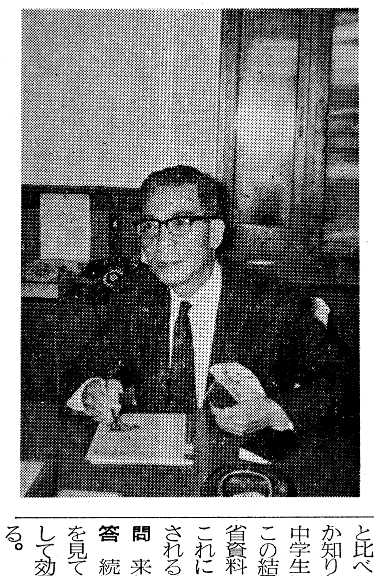
中学中央委員会では、週に三回風紀小委員が自転車置場を整備しているが、まだ始めて間もないので徹底されていない。その上、現在登録されている自転車が約千台(うち八百五十台ぐらいが毎日学校へ来ている)であるのに対して自転車置場には自転車をつめて入れても五百台しか収容できない。

そのことについて担当の高崎先生は次のように語っている。「このことは、第一に生徒の心がけが必要だ。自転車は、きちんと並べれば全部置くことができる。自転車通学者一人一人で気を付ければすぐに良くできることだ。しかし実際は自転車置場はたいへん乱れている。自転車通学者の中に時間ギリギリに来る者が多く、自転車を置ける所なら門に最も近い所に置いてしまうから、新館の西側・食堂の西と南・一Eの前などが特に悪くなる。これは私がいくら言ってもだめなので、私としては、今のところ何もできないが生徒の方で何か運動でも起こしてくれると案外良くなるのではないだろうか」。

自転車に関した問題はそれだけではない。たとえば、自転車置場のクラス別制を無視したり体育の時期に新グラまで無断で他人の自転車に乗っていったり、登録なしで自転車通学する者がかなりいる。いずれも上級生に多く、登録標のない自転車は二月三日の調べでは、高二に十四台、高一に十二台、中三に十四台、中二に九台、中一に四台、その他学年のはっきりしない自転車の中に十台で、合わせて六十三台もあった。以前は違反車にはカードを付けていたが、いつの間にかやめてしまっているこのことについて高崎先生は次のように述べている。

「違反が多いことにはだいぶ困っている。何度も言うように、これは生徒自身の問題で、私がいくら言ったところであまり効果はないだろう。それから、カードのことだが、まだ完全にやめてしまったわけではなく、生徒の方からまたやってもらいたいという声があがったらやりたいと思う」

岐路に立つ土佐校展望



新校舎〝公表〟段階に至らず
土地交渉に手間取る

◇…創立五十周年を目前に控えた本校には現在さまざまの問題が…◇
◇…おし寄せてきている。新校舎建築問題、生徒数増大の問題、…◇
◇…大学紛争の影響による進学問題など……。今、土佐校はある…◇
◇…岐路に立たされているといえるようだ。新聞部ではこれらの…◇
◇…問題に対して、校長にインタビューを試みてみた。…………◇

問　来年度から高一が現在の三百名から三百六十名にふえる。これは三年前に中一を三百名採用したからだが、その理由は何か。

答　余裕があるなら定員をふやして欲しいという世間の要望に応えたもので、新校舎建設などによる経営困難からではない。

問　クラス数がふえると教室の数が足りなくなるが、それはどうするつもりか。

答　プレハブの仮校舎三教室(便所・下足入れ付き)を中庭のテニスコートに建て増しする計画だ。着工は授業をさけて春休みにする予定。

問　三教室分の校舎というと、はじめは使わない教室もあるわけだが、その用途は。

答　体育科の方から、教員の控え室がほしいとの要望があるのでそのようにするつもりだ。

問　生徒の間では、かねてから生徒が自由に歓談できる部屋がほしいとの声が聞かれているが、あとの一教室をそのように利用することはできないか。

答　そのような声があるのなら、考慮してみよう。

問　食堂や自転車置場を増築する計画はないか。

答　ない。自転車置場は運動場へつくりたいが、体育の授業のじゃまになるのでできない。新校舎ができるまで辛抱してほしい。

問　ところで、こんどの増築計画はまだ表ざたにはなっていないがいつ公表するのか。

答　公表はまだしていない。私としては、生徒にあらたまって公表する必要は感じていない。生徒に公表しなければならないという性質のものではないし、以前定員増の方針を決めた時にも、あらたまって通告はしなかった。

問　増築の費用として、新校舎建築協力金を使うのではないか。

答　協力金にはいっさい手をつけない。

問　生徒増に伴う、教員数の調整はどうするか。

答　一度にはふやせないが、重点的にふやしてゆく。

中三〝入試〟は参考資料に

問　今年は高校入試と同時に、入試と同じ問題を中三にやらせたそうだが、そのねらいは何か。

答　現在の中三が高校入学志願者と比べて、どの程度学力が異なるか知りたかったからだが、同時に中学生に対する刺激をねらった。この結果は、学校側の指導上の反省資料として活用する。しかし、これによって高校への入学が左右される、というものではない。

問　来年度もやる計画か。

答　続けるつもりであるが、結果を見てみなければわからない。大して効果がないようなら取りやめる。

問　一部の者の意見だが「中学校から高校へ上がるときに、一クラス分だけ落としたらどうか」とい

大学問題
大学機構の改革必要
学生の政治活動　慎重な行動を

問　大学紛争の現状をどう思うか。

答　手段を選ばず暴力で解決しようとする一部学生のやり方は許されない。しかし現在の大学機構の改革は考えねばならない事だろう。

問　本校生の政治活動を認めるか。

答　日常の勉強によって社会の状態や思想の変遷などを知り、それをもとにして自分の思想を持ち、偏ったイデオロギーに左右されずに慎重に行動してほしい。

問　一九六〇年の安保騒動の時に本校生は政治活動をしたか。

答　そのようなことはなかったと記憶している。

建築協力金、四千五百万円に
〝予定地〟公表できず

問　新校舎建築のことが発表されて久しいが、現在どこまで計画が進んでいるのか。

答　昨年中に土地交渉をすませたいと思っていたができなかった。今のところまだ公表はできないが、なるべく早く公表したい。

問　新校舎の建設地はどのあたりになる予定か。

答　はっきりしたことは発表できないが、高知市の周辺になる予定だ。

問　〝新校舎建築協力資金〟と銘打って、月七百円ずつ集めているが現在までにどのくらい集まったか。

答　一年間に約千五百万円集まる集め始めて三年になるから、約四千五百万円集まった。

問　当分集め続けるのか。

答　続けるつもりだ。当然金を出しても新校舎を使えないものができるわけだが、終戦直後現在の校舎を作った時の先輩や父兄の苦労を考えて、我慢してほしい。

問　新校舎の設備について。

答　特別教室の設備をもっとふやしたいし、英語のL・L教室も、視聴覚教室も作りたい。

問　カウンセリングを設けることは考えていないか。

答　カウンセリングには疑問を感じる。なぜなら良きカウンセラーはそういるものではないし、カウンセラーにまかせきりにせず、全教師がこれにあたるべきだと思う。

児童生徒文化賞
福崎さん、一木君が受賞

本校の福崎裕子さん(二E)と一木譲君(三B)が四十三年度の県児童生徒文化賞を受賞、去る三月三日に表彰をうけた。

福崎さんは作文の分野での活躍めざましく、数々のコンクールで入賞、周囲の者に及ぼした影響も大きいと、芸術部門で表彰されたもの。

また一木君は県下中学校ならびに四国四県中学校の短距離競走の記録を更新するとともに、土佐中陸上部の中心選手として活躍したことが今度の受賞の理由となったものである。

福崎さん談　このような賞をもらえてとてもうれしい。これからも作文をおおいに書いてがんばりたい。

一木君談　ぼくのしていることにこのようなよい評価をしてくれることはうれしい事だし、またありがたいとも思う。これからも、陸上競技、勉強と両面でがんばりたい。

堀内さん亡くなる

本校で警備員をしておられた、堀内鶴夫さんが、三月一日に亡くなられた。死因は脳いっ血。堀内さんは同日朝帰宅され、床の中で新聞を読んでおられたところ、八時半過ぎ、突然発作におそわれ危篤状態におちいり、夕方四時頃亡くなられたという。

堀内さんはこの九月に着任されたばかりだったが、まじめなお人がらで、先生方からの信頼も厚く生徒からも親しまれていた。

葬儀は三月三日に行なわれ、校長はじめ先生方数人が学校代表として参列した。

らくがき

試験などにはもったいない時候になった。春、春…とにかく楽しい季節だが、きょうこの日にも、笑っている人もいれば、悲しみにうちひしがれている人もいることだろう。ちまたには様々な顔があり表情がある。様々な顔の中には様々な人生がある―様々な人生にはどれ一つ同じものはなく、時の流れにまかせて、入れかわりたちかわり無数の人生を展開する。そこに歴史が築かれる▼「哲学者」は、歴史の流れにおいて現在とは何か、現在の人間が占める役割は何かと考える。明治百年がどういう意味をもつかを考えるのも、意義あることであったのに違いない▼百年にはとんと及ばないけれども、わが向陽新聞はこの三月十一日、創刊二十年を迎えた。この間向陽新聞の土台を築かれた先輩方は、まぎれもなく本校の二十年間の歴史を築いて来たのである。それだけに、先輩方にはひとしおの感慨があることだろう。「なぜ、『向陽新聞』がいつまでも私たちをとらえて離さないのだろうか。…学校新聞は、理想学園の建設をめざす。ところが私たちの母校ほど、学校生活にいろいろの障害を感じたところはない。…」≪向陽くらぶ・創刊号より≫▼理想の学園を目指しながらいやおうなしに多くの障害にぶつかる―これは、これまでの恐らくすべての新聞編集者が味わされた、むしろ〝貴重な〟体験である。その障害は、あるいは変革を認めぬがんこな教師であることもあるし、あるいはむしろ〝好意的〟な読者であることもある。そして、最も大きな障害は、ほかならぬ自分自身だとわかる。常により良い方向への変革を望む、歴史の開拓者であるはずなのに、いつの間にかその自分が〝自分の新聞〟を固守しようとするようになる―▼新聞を作ることは、新しい歴史を切り開いてゆくための、自己との闘いの連続にほかならない。だからこそ、『向陽新聞』が私たちの心をとらえて離さないのだろう。(S・Y)

生徒増員の問題をさぐる

広範囲に弊害発生

生徒どうし、ますます疎遠に

本校では四十一年四月以来、中一生徒を三百名採用してきたが、その結果現在では、中学高校とも全学年五クラス編成になっている。これは校舎の収容能力としては、限度いっぱいのものである。そこへ今後も六十名ずつ高校編入生を採るため、三年後には百八十名の増加、高校は六クラス編成になる。そこで、あふれ出る百八十名の収容が問題となり、テニス・コートへの仮校舎建築の運びとなったわけである。

しかし、この生徒増員と仮校舎建築により種々の弊害が生じることになり、一部では深刻に心配されている。このため新聞部では本校の現状をさぐり、校長に対するインタビューなどから、問題点を考えてみることにした。

四十一年からの定員増の方針を決めた理由について、校長は次のように語っている。「一般の父兄からかねてより、余裕があれば定員を増してほしいとの要望があったため、これに応えたものだ。経営の問題には全く関係ないものだし、新校舎建築資金を多く獲得しようなどという考えがあってのことではない」。

また「しかし現在の本校には、とても〝余裕がある〟とは思えない。増員の方針を打ち出した当時としては〝余裕がある〟と考えていたのか」との質問に対しては次の通り答えた。「余裕はあると考えていた。当時の段階では、今ごろまでには新校舎問題のメドがついているものと考えていたのだから」。ここで、校長は今度の仮校舎建築が、学校側の新校舎問題に対する見込み違いによる結果であることを認めた。

これが仮校舎建築についてのいきさつである。ところで、増築による直接の被害者は軟式庭球部。同部は練習用のコートを新グラウンドのみに制限されることになる。このため、現在五十人からなる部員の、コート使用の割りあてに支障をきたし、コートを使用できるのは上級生だけ、中一などは〝乱打〟による練習もできなくなるという。また、同部部長柳原君（二S）は、この増築計画が事前に同部には何の通告もなく、学校側によって勝手に進められてきたことに強く反発しており、「学校側の横暴だ。テニス・コートをつぶしてまで生徒をふやして何になるのか」と、憤まんを訴えている。

生徒数が百八十人増加した場合すぐにひびいてくるのが、自転車置場の問題である。現在本校には、通路という通路にくまなく自転車置場が設けられているが、それでも全登録自転車を収容することはできないばかりか、これ以上の増設も不可能である。おまけに、自転車置場が通路を狭くしているため、非常時の避難の際じゃまになるとの問題をはらんでいる。

対策まったくなし

『新校舎できるまで辛抱を……』

食堂・売店のいっそうの混雑も予想される。三クラスふえるわけだからH、Rのグラウンド割りあてにも支障をきたし、各クラスのグラウンド使用回数は、これまでよりも少なくなるわけだ。また運動会でも、トラック競技で六クラス分の者が同時にスタートすることは困難で、種目によってはできないものもできてくる。

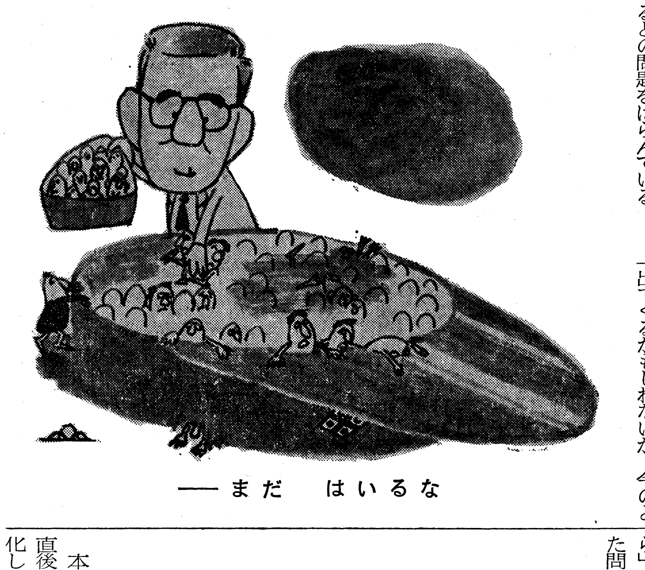
〝第一、今年度の運動会を見ての通り、百八十人もふえたのでは全校体操すらできなくなる〟と心配する者もいる。当然、屋外食堂をどうするかも考えられねばならないが、校長は「そこまでは考えていない」という。

最近では生徒の中でも、本校の対防災体制の不備を気使う者が多いが、仮校舎を建てた場合、現在のテニス・コートの板べいのように、非常時には押し倒してその上を通って避難する、というわけにはゆかない。それに、自転車置場のために通路がずいぶん狭くなっており、現在でさえ非常時にどうなるかと危ぶまれている状態であり、これに増員すれば、危険な状態にますます拍車をかけることになる。

増員・増築後には、このように具体的に差し迫った問題が山と控えているにもかかわらず、学校側としての対策は全く用意されていないのが実情。「そういう問題も出てくるかもしれないが、今のところこちらでも対策は考えていない。しかしそれらは新校舎ができればすべて解決されることだ。諸君もそれまでは辛抱してほしい。学校は、修練の場でもあるのだから」ー校長談。具体的に差し迫った問題ーさらにそれについての対策が考えられていないということが、なお問題であるわけだ。

増員の教育面に与える影響も無視できない。生徒間の関係、ことに土佐中から上がって来る生徒と高校編入生との関係が、ますます疎遠になることが心配される。また「生徒と教師というつながりが薄い」ということはずっと以前から問題にされているが、「生徒数がふえた場合、これに輪をかけることになるのでは…」との懸念が強い。これについての校長の考えはこうである。「そういう心配はいらないと思う。確かにクラス当たりの生徒数六十名というのは多いが、こんどのことではクラスの生徒をふやすのではないから、今より悪くなることはないだろう」。

これらの諸問題に対する学校側の態度は、「世間の要望には応えるが、そのために現在の生徒が少しぐらい困窮することになってもやむを得ない」というものであるととれなくもない。この点について校長は次のように述べている。「本校は私立校でもあることだし世間からの要望があれば、許す限り取り入れてゆかねばならない。生徒も『おれたちが住みにくくなるから、お前たちは来るな』というような、縄張り根性をもつべきではない。共に苦労を分かち合うようであってほしい」。



——まだ　はいるな

新執行部選出さる

会長に筒井君（高校）丁野君（中学）

筒井伸祐君

二月三日、四十四年度前期高校執行部役員を決定するため生徒総会が開かれた。今回の選挙は定員が会長一名、副会長二名なのに対して、それと同数しか立候補者がなかったため、信任投票というかたちで行なわれた。この総会の途中、議事の運営がまずいとして議長不信任案が提案され総会は紛糾した。その上、あるクラスが全員棄権するなどの一幕もあり、選挙管理委員会をやきもきさせたが、結局三候補とも規定の四百票を突破し当選が決定した。

次期執行部の会長、副会長は次のとおり。

会長　筒井　伸祐（一S）
副会長　鈴木　直仁（一K）
　　　岡崎　敬子（一T）

なお、議長不信任案は後日の生徒議会で否決された。

また中学次期中央委員会の選挙は候補者の数が多いため、二月十七日と二十四日との両日にわけて行なわれ、激しい選挙戦の末に当選者が決定した。

次期中学中央委員会の顔ぶれは次の十一名である。

会長　丁野真太郎（二E）
副会長　中村　元彦（一E）
　　　山本　尚文（二A）
中央委員
野並　誠二（一E）
勢登　朗彦（二C）
三浦　秀二（二D）
広井　護（二E）
中山　豊（二B）
入福　卓二（一E）
島崎　恵子（二A）
鍋島　弘子（二C）

おそまつな防火体制

どうなる？非常時に

避難訓練も行われず

消防庁の調べでは、全国の火災件数は四十一年度四万八千件、四十二年度五万四千五百件で、年々増加の一途をたどっている。そのうち学校火災は高知県だけでも四十年に丸の内高が全焼したのをはじめ、四十一年二件、四十二年四件、四十三年には小津高のボヤなど三件が発生している。このような状況の中で本校においても防火体制の不備が案じられている。

本校は校舎が木造でしかも終戦直後に建てられたので非常に老朽化している。その上避難通路も狭く、迷路のように入りくんでおり不利な条件が重なっている。さらに防火体制はどうかというと、これまたたいへんに心もとない状態である。

本校には一応「消防計画案」というものが設けられている。これは十三条に分れていて、三十七年度より実施されているものだが、その内容は現実にはほとんどいかされていない。

有名無実の「消防計画案」

消火器使えぬ先生

それによると五人の先生で「自主検査員」と呼ばれるものが構成されており、年三回、消防用設備の検査がなされることになっている。しかし実際にはほとんど行なわれていない。また校長を隊長とする「自衛消防隊」と呼ばれるものが置かれていて、消火班、警戒班などの五班に分かれ、火災発生時に活動する。しかし、その担当者が、しばしば変わって、今ではどの班に属するかよく知らない先生もいる。

また、本校には消火器がいたるところにおかれているが、その消火器を使いこなせる先生は少ない。このような状態の時、火災が発生すると、どのような結果になるかは明白である。高一のY君は心配そうにこう語っている。

「火災が発生すると、その教課担当の先生が生徒を引きつれて決められた通路より避難する、ということだが、実際はそうはいかないだろう。多くのものが出口に殺到し大混乱になると思う。二階から飛び降りる者も出るだろうし、先生さえも我先きに逃げ出すかも知れない。このような混乱をさけて、避難時に冷静な行動がとられるように、是非避難訓練をやってほしい」。

高知消防所の係の人は、次のように注意している。

「避難訓練は年三回はやってほしいが、そうもいかないでしょうから毎年最低一回はやってほしいものですね。他の学校では、かなりやっていて、ことに小津高や土佐女子高などは必ず年一回行っています。感心なところでは、生徒の間で消防班を編成して、何年生は消火、何年生は避難、何年生は急救にあたる、というようにやっているところもありますよ」。

しかるに本校では、避難訓練は三十八年に一度行なっているだけで、在校生で避難訓練を受けたことのある者は一人もいない。本校の消防計画案によると、「基本訓練ー消火・通報・避難を月一回以上、総合訓練ー一学期一回以上」となっている。しかし消防責任者の玉真先生は、これは現実には年一回が限度だと語っている。だが最近避難訓練が全く行なわれていないのは、先生方の怠慢と言われてもしかたがなさそうだ。

玉真先生談　避難訓練は前からしなければならないと思っていたが、高三の受験勉強にさしつかえる、上ばきのままで避難するのだからグラウンドが湿っていてはいけないなどの条件が重なり、今までのびのびになっていた。しかし高三が卒業したので、すぐにでも行ないたい。

先生出番です

楠本浩子先生

書物のある風景

小さい頃には積木があれば楽しかった。すこし長じてからはクレパスが一本あれば楽しかった。学生時代には親友とコーヒー一杯あれば楽しかった。今では本があれば退屈しない。

というと非常な読書家のようだが、決してそうではない。ただ、「書物のある風景」が好きなだけである。実際私は、必要であるものも、必要でないものも、あまり読んでいない。読みたいけれども悠々と読書を楽しむ暇がない。あれも読もう、これも読もうと思いながら、いつの間にか読まない本、読みさしの本が机の囲りに増えてゆく。

「本というものは読まなくても良い。積んでおくだけでも値打ちがあるんですよ」と慰めてくれた有難い人がある。この言葉に寄りかかったような積読癖が私にも大分あるので、いつ読めるか見当のつかないものまで買い込んでしまう。そのため、親と争って獲得した部屋は、今では書物の重みで床が落ちそうになっている。

私は本を読むのに場所を選ばない。古人は詩文を練るのに好適の場所として、鞍上（あんじょう）、枕上（ちんじょう）、厠上（しじょう＝かわや）の三つ（いわゆる「三上」）を挙げたそうだが、これは読書の場合にも当てはまるかも知れない。鞍上、これは残念ながら私には実行不可能だ。仕方がないので通勤のバスに揺られながら読む。枕上も良い。特に眠られぬ夜のために。学生時代恩師に「寝転んで原書を楽しめるようになれ」と言われて以来、毎夜、必ず本を枕頭に置いておくようになった。だが最近は、それをろくに読まないうちに「枕下」に置いて眠るところまで堕落してしまった。厠上も良いと思うが私にはまだ経験がない。有名な某英語学者は、厠に本棚を作り、COD等の辞典類まで備え付けて読むことにしておられるということをきき、偉い人はさすがに違うと感心したことだった。近頃は暖房などの設備が行き届いているせいか、これを愛用している人もかなりいるようだ。しかし、あまり居心地をよくすると、一日中独占する者がでてくるかも知れないので、ほどほどにしておいた方が良いだろう。

学生時代、私の書物の選択を左右したのは尊敬する師、友であった。人に読書の指導をするのはむずかしい事であるし、また何をどういうふうに読んだら良いかは、読書によって自分で見出すべきものであろう。しかし、できれば若い頃には、やはり尊敬できる方の助言があった方が良いのではないかと思う。

今から五十年程前、京都府立第一中学校では「読書の栞（しおり）」という小冊子が全生徒に配られたそうである。森外三郎校長の序言は「近時刊行の雑誌文学書類には兎角不健全なるものが多くして、往往世の少青年を誤まらしむるようであるから、今回各学年担当の課外読物の標準を示して、濫読の弊を誡（いまし）め、且つ本校に同情を有せらるる新村、西田、河上三博士等の読書に関する説を掲げて、諸子に読書の心得を知らしめたい」とある。西田幾多郎博士は、「運動にのみ趣味を有する者は思想粗本（ほん）となり感情は遅鈍となり、到底精細なる理を考え、深遠なる情を味うことができず」と述べ「何時でも粥のようなものばかり食って居る人は却（かえ）って胃弱に陥るように、何時も易い書のみ読んでいる人は思考力を弱くすると思う。当今の雑誌や小説ばかり読んでいるものは皆脳弱に罹（かか）っていると思う」と説く。河上肇博士、新村出博士等も「書を読むべし。書を読まば古書を読むべし」「文学書より寧（むし）ろ多少哲学がかったもの、或いは哲学的の書よりは科学的の書を読むことを希望する……」というように、諸氏が揃って、あえて難解な古典に挑めと注意している。そして最後に「本校生徒課外読物書目」として数十冊があがっている。このような読書の手引きを貰（もら）った中学生達は、どんなにか幸福だったことであろう。念のため、この小文の最後に、最後に掲げられた書名の中から現在もそのまま受け入れられそうな二、三冊を選んで並べておくことにする。

丘浅次郎「進化論講話」
漱石「我輩は猫である」
ラム「沙翁物語」

外野席

喫茶店がなぜ悪い？

皇帝・栄光・王朝・第五・第一…etc。これはすべて喫茶店の名前。近頃また喫茶店についてのとりしまりが強化された。父兄同伴でもいけないのだそうである。いったい、学校側はどうしてそんなに厳しく禁止するのだろうか？

学校側のいう第一の理由は、喫茶店にタムロするいわゆる不良グループと知り合いになってその仲間へズルズルとひき込まれるといけないからだという。しかし、ここで考えてみたいのは、何故喫茶店へ行くのか？ということである。その理由はー話がしたいからー今の学校にはあまりに話し合いのできる場所、時間、雰囲気、そして友達がいないから。はやくいえば学校には勉強するだけの空気しか漂っていないというのである。だから喫茶店へ行く。いろんな人と話しをする「喫茶店へ行くと本当の自分を出して話しをすることができる」「勉強に疲れたとき行って別の世界のいろいろなことを吸収できたし決してマイナスにはならない」と経験者は語る。喫茶店へ行っても不良グループとつき合って堕落してゆくのは自分というものがしっかりしていない本当に一部の者ではないのか。〝経験者〟たちも、そう間違った利用はしていないように思える。

それから次に、タバコを吸うから、というのも禁止の理由である。〝喫茶店でタバコを吸ってつかまった〟なんていう話を聞くことがある。高校生の喫煙はもってのほか。それは厳しく罰せられるべきである。それは私達もそしてその人自身もわかっているのである。それではどうして？　結局、喫茶店のムードにおぼれてしまう。だから喫茶店がわるい、とこうなってしまうようである。

映画館でタバコを吸っている生徒もいる。その人たちは注意もうけずに次もまた同じことをしていたのである。映画館は禁煙の赤ランプがついているにもかかわらず、ノウノウとタバコを吸っていたのである。また、学校から目と鼻の先にある食堂で、タバコを吸っていた者もある。彼らもまた別に何のとがめ立てもうけなかった。罰せられたのはたまたま喫茶店で吸っていたからだろうか、吸っていた場所が悪かったのだろうか？。

あまりに喫茶店喫茶店と騒いで、まるで喫茶店を頭から不健全なものと決め込んで禁止し、学校付近の食堂は健全だと思いこんで注意しない。ここのところが納得がいかないという意見の者が数多くいるのである。しかし非行と不良化というものは何も喫茶店のあのムードの中ばかりから生まれるものではない。要はその者の心の持ち方如何によるものである、ということである。

さて、どうすれば先生も生徒も理解し、信頼し合って楽しく喫茶店を利用できるようになるかということであるが、これは私達に与えられた今後の課題であろう。学校からの指定制にするか、また学校直営の喫茶店をつくるかなどの声もある。しかし、実現の難しいことを考えるよりも、今は喫茶店に行くことが、決して人間形成上マイナスではなく堕落するなんてことはない。むしろプラスに利用できるのだということを態度でしめして少しずつ良い方向へ向けていくことが一番大事なことだと考える。

（H・Y）

サッカー・クラスマッチ行われる　高校

高校のサッカークラスマッチが二月十九日から高校入試期間を利用して行なわれた。

その結果、高一S－Aチーム、高二T－Aチームでそれぞれ学年優勝した。そして二十六日の試合で高一S－Aチームが接戦の末、高二T－Aチームを一対〇で破り全校優勝をとげた。

サッカークラスマッチは「生徒の体力増強やクラス同志の親ぼくを図ろう」と、昨年度から行なわれている。

今回は各チームとも実力が伯仲していて、延長、抽選があい次いだ。

天候不順のため、全般的にグランドコンディションが悪く、全身泥まみれになって奮闘する光景も多く見られた。

東大紛争の影響深刻

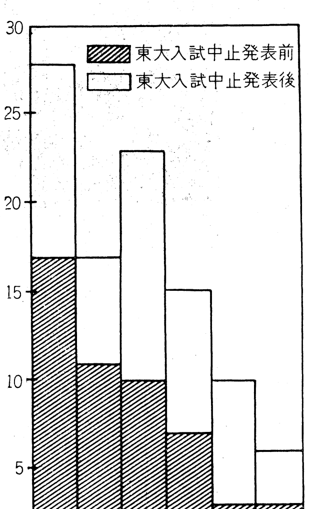
本年度　大学志望状況まとまる

国立第一期校の入試もさほど激しい妨害もなくおわり、合格発表の報じられる頃となったが、四十四年の本校の進学状況をみると、二百八十七名中二百八十五名が進学希望である。そのうち国立大学への志願者は百七十五名、公立大学が三十名、私立大学七十名、その他の大学が十名となっている。

東京大学の入試中止によって受験者数が変化した学校をみると、一ツ橋大学が三名から十名に、東京工業大学が三名から六名に、京都大学が十一名から十七名にとどまっている（別表参照）。

文科系は百二十六名、理工系百四十六名、その他が十三名となっていて、学部別ではトップはやはり工学部の六十三名、次いで法学部の五十二名、医学部の四十八名、文学部の十七名、商学部の十四名などとなっている。

山岸先生談　東大入試中止の影響は大きく一流大学ばかりでなく、全部の大学に影響を及ぼすことになるだろう。しかし、今そのようなことは気にせずに、落ち着いて試験に臨んでほしい。



編集後記

またしても新聞発行が遅れてしまった。予定では卒業式の前に出すはずであったのだが部員の少ない悲しさ、思うようにならなかった。現在、高校では生徒増大をめぐって論議が交されているが、仮校舎建設などの情報を逸早く握った新聞部の報道が遅れ、学内の世論を喚起することも出来なかったのは遺憾である。

学園生活の中で重要な報道の役目を持つ新聞部がこれではなんとも心許ない。そこでなんとしても部員が欲しい。新聞に興味のある方、無い方、誰でもどしどし入部して下さい。今後私たちの後を継ぐ者も殆んどいないのです。向陽新聞二十年の歴史のためにも、特に中学の方、ぜひ入部をお願いします。

文化祭アンケート結果まとまる

映画、写真、ブラバンに人気

去る二月十日、十一日の両日行なわれた文化祭について、新聞部が後で行なったアンケート調査の結果は別表の通りである。その他「模擬店をもっと広くしてほしい」「ステージの一般生徒の出演を認めてほしい」「ステージは自主観覧にしてほしい」などの要望や、「展示教室の所のバリケードは通行のじゃまだ」とか「校外への宣伝をもっとやったらよい」とかの提言も見うけられた。また、「二年に一回では不十分だ。文化祭は毎年催すべきだ」という意見が特に目立った。

今回も前回にならって模擬店を経営したが、今回の収益は四万五千九百九十七円で、前回の十四万円より大きく下回っている。収益金の用途は、今考えられているところである。

盛況の模擬店—にわかウェイトレスもかいがいしい。

問1	あなたは文化祭の展示物を見ましたか	全部みた	43(%)
		殆んどみた	36
		少しみた	17
		まったくみなかった	4
問2	展示物はどこの部が一番良かったと思いますか	1　映画部	
		2　写真部	
		3　美術部	
問3	ステージはどれが良かったですか	1　ブラスバンド	
		2　音楽部	
問4	総合的にみて例年より良かったと思いますか	良かったと思う	46
		良くなかったと思う	54
問5	来年もやればよいと思いますか	思う	75
		思わない	11

声

のび悩む生徒自治に一言

二月三日月曜日次期執行部正副会長候補承認のための生徒総会。最初からなっていない。あれこそ生徒自治荒廃のどん詰りと言うところだ。〝何か一発やらかしたろ〟という奴に、かき回された観があった。しかし、彼らに責任があるのではない。彼らは自己表現欲が旺盛であり、野次をとばすことしかできない奴よりはずっと堂々としていて、ただ単に馬鹿だったにすぎない。ステージの上へあがるのがうれしくて、何のみさかいもなくあがったのにすぎない。そうして多くの良識派は、そんな彼らが総会を混乱におとし入れそうだと感じながらも（単発的に飛び出して行った良識派が一人いたけれども）ともかくも、全体の声とはなり得なかったのである。

あの総会においての責任は議長にある。議長不信任案は正当だったと思う。不信任案が一時は総会を混乱の中におとし入れたかと見えたが、実は解決への最短コースであったのだ。最初から、議長は不穏な空気をより早く察して議長職権で決定すべきだった。彼一人の過失で十五分かける六百で百五十時間の偉大なる損失を産み出したわけである。

進行の責任は議長に帰することはできようが、生徒側は非難されなくてもいいのであろうか。執行部が「生徒は、生徒会に注目すべきである。」などとほざいてみても、それは無益なことだし、正確には正しくない。なぜなら、運動会もクラスマッチも文化祭も、そんなものは必要ない、生徒会も必要ないと断言する奴もいる。生徒は勝手なもので、一度参加すれば熱心になりやすいが、無関係な時には全然無関心でいられるからである。けれども、これをとがめることができようか。執行部のメンバーでも自分の立場として考えながら、自分も無関心にならざるをえないということを、人情的に理解せざるを得ない。要するに生徒会は強制権を持っていないし、生徒会なくして生きて行けない、学問ができないというものでもない。だから生徒会は永久的に暗中模索の運命を背負っているのであり、生徒会が義務となったら、それはもはや生徒会ではないのである。

少し奇妙な考え方だが、今日あるがままの生徒会でも十分ではなかろうか。生徒会は〝多くの生徒の視野を広げる機関〟〝お互いに影響し合う機関〟ではあっても、決して〝政治機関〟ではない。そうして、その中で皆が考え合うことに意義があるのだ。

結論的にいって、生徒会に参加すれば、何らかの大きなプラスを受ける。そのプラスを与えてくれるのは誰か、彼らを悩ましてくれる〝無関心〟な一般生徒なのである。奇妙な話だ。生徒会は伸びようとして伸びなやむ人生の青年期を一致する。いくら背伸びしても伸びるということはない。しかし努力を怠ったとたんに奈落の底に転落してしまうというやっかいな代物なのだ。

傍観者にとってこれほど馬鹿げたことはない。けれども生徒会のメンバーは〝馬鹿げた事〟から何かをくみとって傍観者以上に大きく成長するのだ。生徒会は伸びない。けれども各個人は伸びる。馬鹿げていてしかもパワーを持つもの、それが生徒会の実体だ。

傍観者諸君、君らは頭が良いためにかえって損をしている。砂の中にも、たまにはダイヤモンドもあるんだよ。まあだまされたと思って生徒会に参加してみようではないか。

真の悟りは、机上では成り得ない。体験のみがそれを真実にするのだ。

（高二　Y・T）

トピックス

文化祭に〝水の協賛〟

▽…文化祭の行なわれた二月十一日、時ならぬ水音がプールで起こった。水泳部の面々が、「われわれも変わった趣好で、文化祭に協賛しよう」と、頃合いを見計らって、ざんぶとばかり跳びこんだもの。

この時新聞部の展示室（二S）前付近の廊下からは、何事かあらんと、好奇のまなざしが注がれた。

寒中水泳には慣れっこ（のはず）の彼ら、〝上陸〟第一声は、「さわやか！」